

研究の概要

Ⅰ 学校教育目標を達成している子供の姿

「自立に向けてたくましく生きる」という学校教育目標について、本小中学校では、以下のような子供たちの姿をイメージした。

「自立」とは、自分の思いや願いを叶えたり、みんなの幸せを考えて行動したりしている姿を表している。「たくましく」とは、思いや願いを叶えるための方法や考え方を身に付けたり、目的達成の途中であきらめることなく挑戦し続けたりする姿を表している。

上記の姿を目指すために小中学校の教職員で導き出したのが、「自己実現」の3つの姿と「共生」の姿である。

「自己実現」では、まず子供たちが「〇〇したい」「〇〇になりたい」という思いを持ち、その解決に向けた見通しを立て、身に付けてきた解決のすべ（手段・方法）を活用しながら繰り返し問題解決に向かう姿を想定している。9年間の学校生活の中で様々な問題解決に取り組むことで、これからの人生でも応用可能な力を養っていけると考えている。

「共生」では、自己理解と他者理解を通じて一人ひとりの違いを理解し、お互いを認め

合い切磋琢磨し合う環境が空気のように当たり前に存在することで、探究活動がより深い学びになったり、よりよい社会を作り出していく意識が高まったりしていくことを想定している。

小中学校9年間でめざす「自立に向けてたくましく生きる」子供のその先には、Well-being（みんなが幸せに生きること）を志向する姿をイメージしている。この目標が9年間で終わるのではなく、人生を通して考えていけるようなものであり、子供の成長を保証するものとして、本小中学校では次のような研究主題を設定した。



2 研究主題

自己実現と共生を軸に据えた教育課程の創造

～生活に生きる力の育成を目指した授業デザイン～

3 研究構想について

○自己実現の3つの姿

自己実現

- ・「〇〇したい!」「〇〇になりたい!」をもっている姿
- ・解決のすべを知り、使っている姿
- ・目的の達成に向けて、繰り返し取り組もうとする姿

まずは、この構想の根幹を担っている考えがある。それは、「子供は生まれながらにして有能な学び手である」という子供観である。この考えのもと、この構想がスタートしていることを初めにおさえておきたい。そのため、樹木（イメージ図）の根の部分には「一人ひとりの思いや願い・個性」を大切にしながら教育活動を実施していくという教師の思いが込められている。この「一人ひとりの思いや願い・個性」を大切にしながら授業を展開していくこと自体が、自己実現の1つ目の姿、**子供の「〇〇したい!」「〇〇になりたい!」という姿**を引き出すことになる。

次に、樹木の幹の部分で「生活場面（探究）」としている。この研究の目的である自己実現と共生の姿は、子供たちが自分の人生を幸せに生きていけるようにと願って作ったものである。その願いと同様に、構想図も子供たちが生きていく実生活や社会生活で起こる様々な問題に、適切且つ個性的・創造的に解決できるようになってもらいたいという思いで作っている。そのため、幹をなすのは生活場面での探究であり、子供たちが、この幹をどれだけ太く立派なものにしていけるかということを大切にしている。具体的には、生活科や総合的な学習の時間、特色のある行事活動を大切にすることで、実生活や実社会に関わる探究的な学びを充実させていく。

そのような考えから視野を広げ、枝・葉に位置づけた教科の役割について説明する。教科には、学問・科学・芸術といった親学問があり、そこには先人の知恵が豊富にある。その知恵の中で、生活場面に生きるものは何かを改めて問い直していく必要があると考えている。各教科の目的を明確にした上で、生活場面で有効に働く汎用的な力や生活場面に生きる知識は何かを整理していく。そして、教科の学びを通して培ったものが、生活場面に活用・発揮できた時に、イメージした樹木の幹はより太く立派なものになっていくと考えている。この考えを自己実現の2つ目の姿、**解決のすべを知り、使っている姿**として表出している。



自己実現の3つ目の姿、目的の達成に向けて、繰り返し取り組もうとする姿については、全ての教育活動の中で、目的を明確にしながら子供たちが主体となって活動していくこと。また、その目的を達成するために粘り強く、繰り返し取り組む姿を想定して設定した。これが自ら主体となって探究する姿であると考えている。さらに、長い時間をかけながら目的に向けて試行錯誤し、達成感・成就感を得ることで、情意面が育成され、自己実現の1つ目の姿、子供の「〇〇したい!」「〇〇になりたい!」という姿に繋がっていくと考えている。

以上の自己実現の3つの姿は、相互に関連し合いながら循環していく。その循環を通して、以下のような子供の姿の高まりが見られると考えている。

- ・子どもたちの「〇〇したい!」「〇〇になりたい!」という姿が、漠然としたものから具体的なものになっていく。
- ・解決のすべを知って使うことで、質、量ともに高まり、実生活や社会生活で起こる様々な問題に、適切且つ個性的・創造的に解決できるようになっていく。
- ・繰り返し取り組み、達成感・成就感を味わう経験を積み重ねることで「達成するまで続けたい」という思いを持つ子になっていく。

○共生の姿

共生

- ・一人ひとりの違いを理解し、よりよい社会生活の在り方を追求している姿

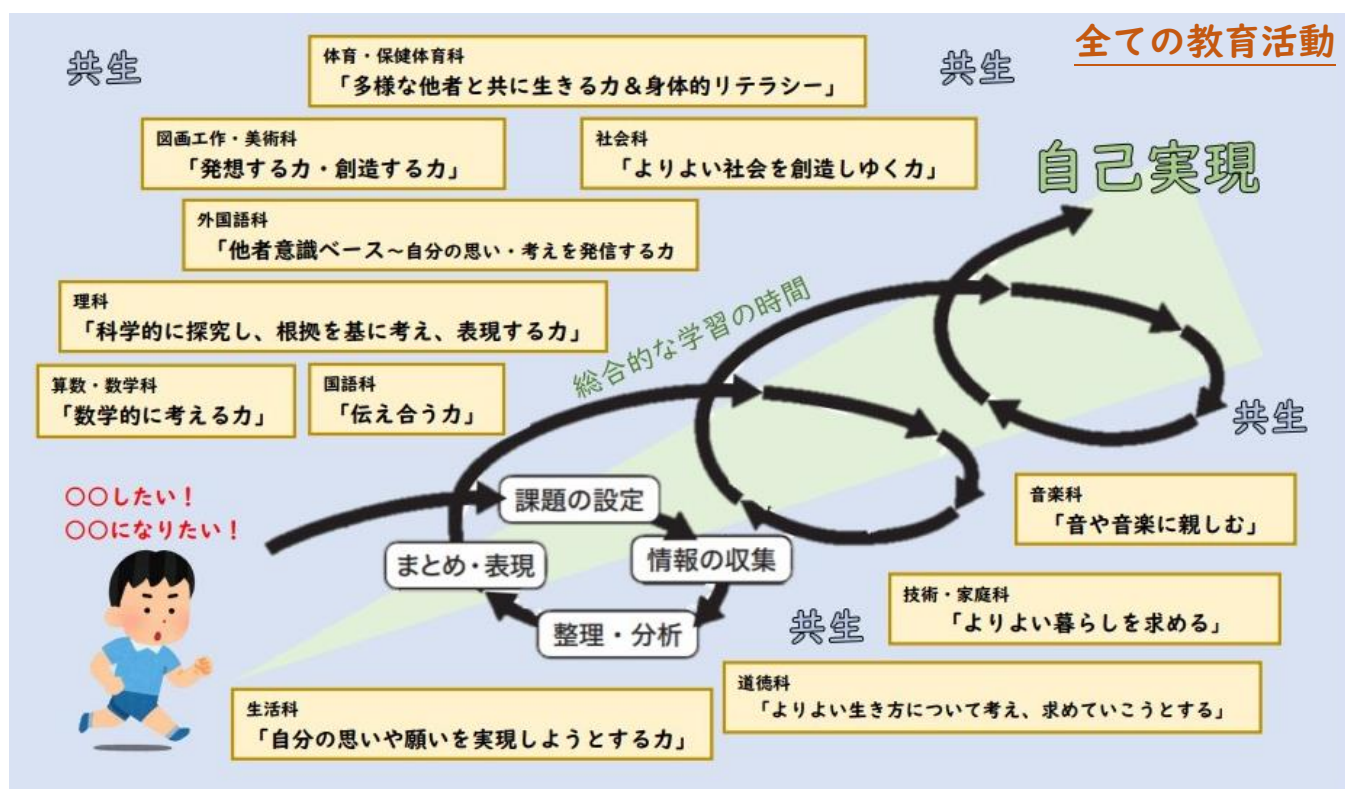
これから子供たちは、誰もが安心して暮らせる社会を作り出していくために多様性を尊重しながら、お互いが補い合い生きていくことが求められている。そのためにも、多様な在り方を受け止めることや対立関係を調整することができるような力をつけていくことが大切になる。

以上のことを考えた時に、「一人ひとり違うということの理解」から始める必要がある。その理解を前提として、クラスやグループで共通の目的を達成するような活動を取り入れる。そこで、納得解や最適解を見つけ出すことで、さらなる一人ひとり違うといったことへの気付きと、みんなでよりよい社会生活の在り方を模索していくことができる子供の姿をイメージしている。

そのようなことを想定し、構想図には一人ひとり違うということの理解と最適解や納得解を見出す活動が自然と行われている状況を空気のような存在として位置づけている。具体的には、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させながら教育活動を展開し、共生の意識を高めていく。



4 研究構想の具体的なイメージ



1 ページ目の樹木の構想図を具体化したものが上図になる。

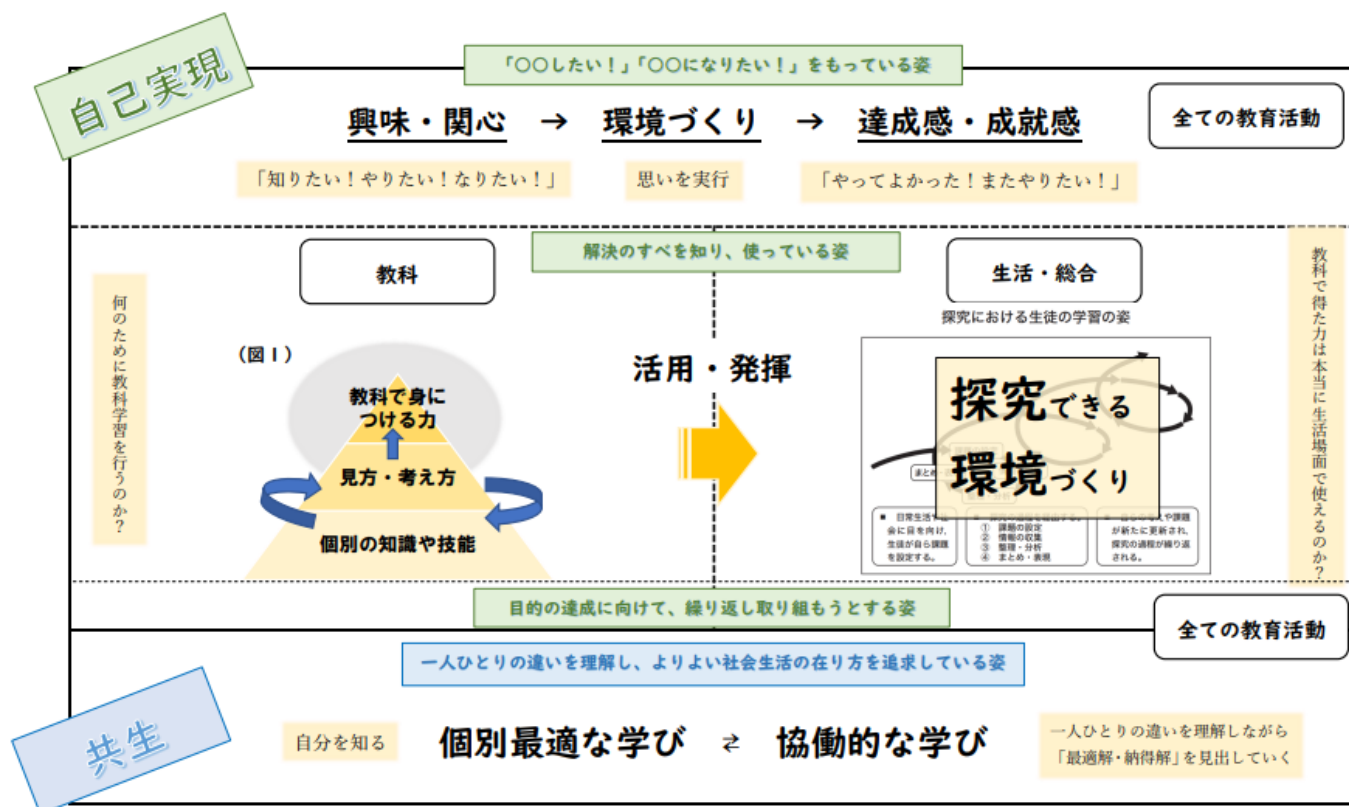
イメージとしては、**自己実現できる子**を育成するために、各教科で身に付けた資質・能力を総合的な学習の時間で発揮していく構造をとっている。そのため、教科で培った力を発揮できる場として、総合的な学習の時間（探究の時間）を教育課程の中核として位置付けている。

総合的な学習の時間では、子供一人ひとりの「〇〇したい! 〇〇になりたい!」という思いを大切にしながら活動を展開していく。その活動の中で、「課題の設定、情報収集、整理・分析、まとめ・表現」という手法を必要な場面で使いこなせる子を育成していく。

教科では、本校の各教科部で「なぜ今の時代にその教科が必要なのか?」「生活場面で願う子供の姿とは?」ということを考え明確にしてきた。そして、それぞれの教科で大切にすることを上図に記載した。詳しくは、この後の**各教科 DS**に記載している。

今後、この教科 DS を子供と共有し、子供が教科の意味・特性を理解しながら、教科を自律的に学んでいけるようにしたいと考えている。そうして、教科を通して力を付けてきた子供たちは、総合的な学習の時間の活動の中で、「この場面では理科の実験の時の方法を使って活動の見通しを立てよう。」「この場面では、社会の時のように多角的に物事を見て話し合ってみよう。」というように自分たちで学んだことの発揮場面を考えながら自己実現していく子供の姿を想定している。

5 研究構想の実現に向けた具体的な方策



全ての教育活動

～自己実現～

◎「〇〇したい!」「〇〇になりたい!」をもっている姿

◎解決のすべを知り、使っている姿

◎目的の達成に向けて、繰り返し取り組もうとする姿

子供が自己実現力を育てていくための環境を整えていく。そのために、小学校6年間・中学校3年間で別々だった教育課程を小中学校9年間の教育課程として再編成していく。

- 1、育成する資質・能力を明確にし、各教科・各行事で9年間の繋がりを考えていく。
- 2、教育課程の中で、各教科と総合的な学習の時間の役割を明確にし、修得・活用・探究の構造を見える化して、自己実現力を育成するまでの過程を明確にする。(4ページ目参照)

～共生～

◎一人ひとりの違いを理解し、よりよい社会生活の在り方を追求している姿

全ての教育活動の中で、個別最適な学びと協働的な学びを通して、自分理解、他者理解を深めたり、最適解・納得解を導き出したりできる機会を設けていく。その過程の中で、一人ひとりとは違うということへの理解が深まっていったり、その理解をもとにしてよりよい社会生活の在り方を追求したりしている姿をイメージしている。

教科

～自己実現～

◎「〇〇したい!」「〇〇になりたい!」をもっている姿

教科では、学習指導要領でいう「内容」が明確に定められている。教師は、この「内容」に興味・関心を持てるような働きかけをしていく。例えば、子供たちの持っている既有知識を足場に授業を構成したり、実生活・社会生活の学びと関連付けたりしていくということが考えられる。

次に、子供たちが持った興味・関心を足場に、その思いや願いを叶えていける環境（時間や場）作りを大切にしていく。その環境の中で思いを生かしながら教師のねらいに向かっていけるようにする。この一連の取り組みの中で、子供たちの達成感・成就感に繋がられるようにしていく。

◎解決のすべを知り、使っている姿

各教科では、「何のために教科学習を行うのか?」ということ問い直し、改めて教科で身につけていく力を明確にする。その際、教科で身につける力が教科内だけで働くのではなく、実生活やこれから子供たちが生きていく社会生活でも生きる力なのかということを考えて設定していく。各教科で身につけていく力には下から「個別の知識や技能」「教科特有の見方・考え方」「教科目標」のような階層があると考えている。図1のように視覚化することで、教科の最上位目標を意識しやすくしている。各教科、実践を積み重ねる中で、生活場面に発揮しやすい見方・考え方や個別の知識や技能についても検討し、各教科の強みを明確にしていくと共に、教科目標を達成するまでの方策を明らかにしていく。

◎目的の達成に向けて、繰り返し取り組もうとする姿

「目的を明確にする」「繰り返し取り組めるような環境づくりをする」という2点を大切にしていく。単元の目標を達成するという視点だけではなく、教科の目標を達成するために、単元をまたいで繰り返し取り組むことが考えられる。同じ学び方や同じ授業展開など、学びを繰り返す中で、教科特有の見方・考え方を身につけたり、教科目標を達成したりしている子供の姿をイメージしている。

総合的な学習の時間

～自己実現～

◎「〇〇したい!」「〇〇になりたい!」をもっている姿

総合的な学習の時間のような生活場面に関する学習では、社会にある学びの探究を大切にする。また、「子供たちの思いや願いを生かすことができる時間」という強みを生かすためにも、今の子供たちの思いや願いをしっかりと受け止めるようにしていく。実際には、子供たちの自己決定・自己選択を重視し、子供たちの「〇〇したい!」を引き出せるようにしていく。

環境づくりに関しては、子供の思いや願い、気付きの質の高まりに応じて更新していく事や、発達段階に応じて子供たちが自分たちで環境を作り出していくということも大切にしていきたい。こうした環境の中で試行錯誤し、目標を達成することで、「やってよかった!」という思いに繋がっていく。この達成感・成就感が子供の情意面を育成し、「次は何をしようかな?」と自ら主体的に考えを広げていける子供の姿をイメージしている。

◎解決のすべを知り、使っている姿

各教科で得た力を「解決のすべ」として蓄え、生活科・総合的な学習の時間や行事のような生活場面で発揮できる子を育てていく。そうすることで、各教科と総合的な学習の時間が相互に関連し合いながら、総合的に子供を育んでいけると考えている。そうして力をつけた子供は、これから生きていく実生活や社会生活で起こる様々な問題に、適切且つ個性的・創造的に解決していけると考える。

総合的な学習の時間での探究の姿としては、「課題の設定、情報収集、整理・分析、まとめ・表現」を自分の力で何度も繰り返す子供の姿をイメージしている。そして、総合的な学習の時間で培う「解決のすべ」はこの探究の姿にある。この探究の繰り返しの中で、リフレクションを大切にしながら、子供たちの気付きを促進し自己の生き方・考え方に繋げていける子をイメージしている。この一連の営みの中で、どれだけ教科で培った力が発揮されているのかを見取り、教科の重要性を再認識できるようにしていければと考えている。

◎目的の達成に向けて、繰り返し取り組もうとする姿

プロジェクト型の学習を行う。子供たちが自分たちで目的や目標を考え、そこに辿り着くまでに見通しを立てて試行錯誤する活動を行う。この活動の中で、目的・目標の設定はとても重要である。子供たちが設定したものが高すぎると達成感を得られず、低すぎると物足りない活動になってしまう。そこで、教師のかかわりが大切になる。達成に至るまでの見通し（時間・活動）を子供に聞きながら、目的・目標と一緒に検討していくことが大切になる。

「繰り返し取り組もうとする姿」については、時間の保障がされている総合的な学習の時間のメリットを最大限活用していく。ポイントになるのが、繰り返し取り組む環境があるかどうかである。子供の「やりたい！」を叶えていくためにも大人の都合で活動が停滞するということは避けていきたい。そのためにも子供の都合で進められる学習材とは何か。どのような環境をつくればよいか。というのを考えていきたい。

参考文献・引用

汐見稔幸 『「天才」は学校で育たない』 ポプラ社 2017

汐見稔幸 『教えから学びへ』 河出書房新社 2021

白井俊 『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来:エージェンシー、資質・能力とカリキュラム』 ミネルヴァ書房 2020

田村学 『「深い学び」を実現するカリキュラム・マネジメント』 文溪堂 2019

奈須正裕 『教科の本質を見据えたコンピテンシー・ベースの授業づくりガイドブックー資質・能力を育成する15の実践プランナー』 明治図書出版 2017

奈須正裕 『「資質・能力」と学びのメカニズム』 東洋館出版社 2021

奈須正裕 『個別最適な学びと協働的な学び』 東洋館出版社 2021

奈須正裕 『「少ない時数で豊かに学ぶ」授業のつくり方 脱「カリキュラム・オーバーロード」への処方箋』 ぎょうせい 2021

奈須正裕 『個別最適な学びの足場を組む。』 教育開発研究所 2022

野田敦敬 田村学 『学習指導要領の未来』 学事出版 2021

平野智久 『「はじめに子供ありき」の理論と実践』 東洋館出版社 2022

藤原さと 『「探究」する学びをつくる』 平凡社 2020

教科 DS の見方

〇〇〇〇〇科

教科デザイン

小学校：
中学校：

教科部で大切にしていること

下記のことを踏まえて、「教科部で大切にしていること」を記載しています。

●なぜ今の時代、この教科が必要なのか？ ●なぜ右図の資質・能力を設定したのか？ ●それらを育むまでの大まかな道筋 を記載しています。	問題を解決するために、各教科に固有の個別的な知識・技能を身に付けたり見方・考え方を用いたりする過程を辿ります。その積み重ねの中で、子供が各教科でどのような力をつけていけば良いのかを一番上に記載しています。
--	--

願う子供の姿

実生活や実社会で、教科の学びを活用している子供の姿を記載しています。

小中の取り組み

「小学校、中学校、共通の手立て」を記載しています。

小学校	中学校
願う姿に辿り着くまでの具体的な手立てを小学校、中学校で系統を意識しながら記載しています。	

教科部で大切にしていること

言葉により”伝え合う力”を育むこと

言葉は、社会生活の核である。ここでいう言葉とは、音声や文字などにより、情報や意志などを伝達する手段となる表現を含むものである。

私たちは言葉をとおして他者とつながり、社会生活を営んでいる。言葉でお互いの意志や考えを伝え合うことで、社会で生きる多様な他者を理解し、共生を目指していくことが必要である。

また、言葉は他者とのコミュニケーション手段であるとともに、他者を通して自分が何者なのかを知り、自己形成・自己実現していくために欠かせないものでもある。

言葉への自覚を高め、語感を磨き、語彙を豊かにすることで、日常生活や社会生活で言葉により伝え合う力を育むことができるのではないかと考える。



願う子供の姿

単に国語の特質を知ることにとどまるだけでなく、目的に向かって自ら情報を得たり、互いの思いや考えを伝え合ったり、よりよいものを生み出したりする際に、意思疎通を図ることができる“言葉”を用いて活動する姿を願っている。

そのためには、情報を比較・分類したり、対比・因果関係を捉えたりしながら、必要な情報を選択することを通して、自分の考えを形成する姿を目指す。さらに、他者と意思疎通を図るために論理的に伝え合う活動を通して、新たな発想や思考を創造したり、自分なりのものの見方や考え方を形成したりしながら、言語能力を向上させていく姿を期待している。

小中の取り組み

- ・自分の“伝えたい”ことを伝えるために、根拠や理由を基に自分の言葉で説明できるようにする。
- ・自他の価値観を認め合ことで、自分の考えを広げたり深めたり再考したりすることができるようにする。

小学校

小学校では、“言葉”を通して語り合うための土台作りをする場であると考えている。何に注目して、どのように考えればよいのかという「見方・考え方」をはたらかせるために必要な知識・技能を育むことを目指す。また、各領域で設けられた学習過程を明確にして取り組むことで、子供たち自身も学習過程を意識し見通しをもって取り組むことができるようにする。その中でも小学校では、「考えの形成」を重点にする。“自分なりの考え”を根拠や理由を基に自分の言葉で説明できるようにしていきたい。

また、「読むこと」領域で得た学びを「書くこと」や「話すこと」の領域で活用することを通して、汎用性のある学びを実現できるようにしたい。

中学校

小学校国語科と中学校国語科の学習過程は統一されている。そのことを踏まえ、小学校で培われた「見方・考え方」を日常生活から社会生活へと更に深化させていく。その手立てとして、次のことに重点的に取り組む。

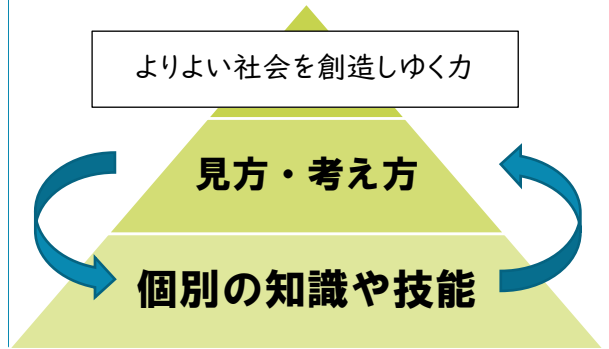
- ・グループワーク等を行うことで他者と意見を「共有」し、よりよい「考えの形成」を目指す。自分の考えを述べる際は、テキストや事実に基づいた根拠を述べられるようにしたい。
- ・シチュエーションや相手を明確にして、意図的に言葉を選ぶ必要がある状況をつくることにより、語感を磨く機会を作りたい。
- ・三段論法や三角ロジックなど、論理的に考えるために必要な技能や思考ツールを用いる練習をし、論理的に考え、表現する力を高めたい。

教科部で大切にしていること

よりよい社会を創造しゆく力

社会科では、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力を育むことが求められている。

鎌倉小・中学校の社会科部としては、習得した知識・技能を活用し、(多面的・)多角的に思考して意欲的に課題を解決しようとする活動を重視する。そういった経験を積み重ねる中で、自他の人格を尊重しあい、社会を形成していく人間としての在り方や生き方などについての自覚を持てるようにし、よりよく生き、よりよい社会を創造するための資質・能力を育成することを大切にしている。



願う子供の姿

グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力を育むために、以下のように、教科を通して願う子供の姿を設定した。

- ・ 社会から課題を見抜く姿⇒問い続ける姿
- ・ 課題の解決に向け、選択・判断(・構想)する姿
- ・ (多面的・)多角的に考え、表現する姿

これらは、互いに関連しあい、影響し合いながら高まっていく力であると考ええる。

実生活においては、社会的事象に対し、常に問い続ける子供の姿や、様々な視点から考える子供の姿が現れるよう指導を進めるとともに、様々な学習の中で、粘り強く課題の解決に取り組める姿をめざす。

小中の取り組み

- ・ 他者と協働して問題を解決していく学習場面を設定する。
- ・ 「社会の課題を見抜く」ことができるような社会事象に出会わせることで、子供たちの間に問いを生じさせ、選択・判断をさせるような学習材を用意する。

小学校

公民としての資質・能力に必要な「広い視野に立つ」ためには、社会的事象を多角的にとらえ、情報を広く集める必要がある。そのために、二つの手立てを行う。

一つ目は、「人の姿」「人の営み」を通しての学習である。様々な立場にある人々の思いや願い、葛藤、立場による考えの違いなどに合わせたい。

二つ目は、業間や授業時間内での個人が探求する時間を保証することである。

中学校

課題解決のために必要となる「社会的な見方・考え方」の育成を通して、思考力、判断力、表現力を身に付け、よりよい社会を作り上げたり、支えたりする人として成長していく姿を願う。そのために、主体的に社会に参画したいという意欲を高めさせるための仕掛けや働きかけを大切にし、公民としての資質・能力の育成を図っていく。

他者と協働しながら学習課題の解決に向けて粘り強く繰り返し取り組ませる。そのために、これまで身に付けてきた「社会的な見方・考え方」を活用しながら、単元を貫く問いの答えを見出す活動を行う。

問いを立て、選択・判断・議論を重ねる中で、多面的・多角的に思考したことから、解決のすべを身に付け実行に移すことができる子供たちの育成を目指す。

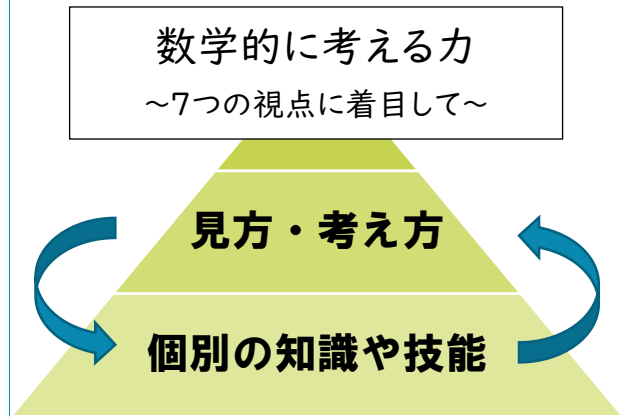
算数・数学科 教科デザイン

小学校：荒谷舞 山口勇馬
柏木良輔 丸山健太郎
中学校：慶徳大輔 小野郁絵 湯川拓実

教科部で大切にしていること

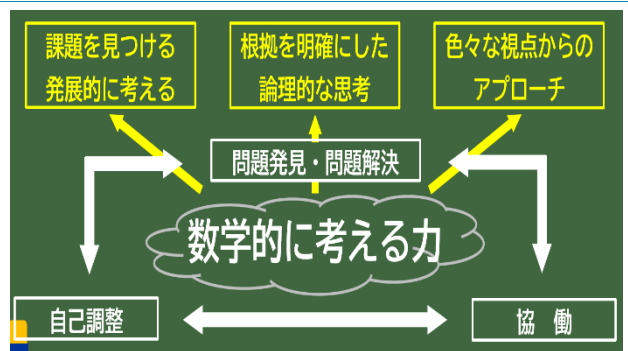
数学的に考える力 ～7つの視点に着目して～

変化の激しい時代を生き抜く子どもには、未来を予測し変化に対応する力が求められる。数の四則演算の知識・技能、数量や図形に関する感覚は豊かな日常生活を送る上で不可欠であり、日常にある事象を数理的に捉えたり、解決したりするための数学的な見方・考え方が大変重要となる。また、どのように解決すればよいかを考えたり、他者の考えを受け止めたりして、粘り強く問い続けていく過程も大切に積み重ねていきたい。単に問題を解決すればよいということではなく、「もし～だったらこうなる」「このきまりが使えるのだ」など、数学的な見方・考え方を育成できる問いや問題解決場面を設定していく。



願う子供の姿

- 自らが日常的な事象の中から問いを持つ姿、解決に向けて経験や既習事項と結び付けて根拠を明確にし、筋道を立てて考察する姿、試行錯誤しながら粘り強く問い続ける姿を願う。
- 数学的な根拠をもとに考えを伝え合ったり、仲間の考えを受け入れたりすることを通して、互いの考えを広げ深める姿を願う。
- 問題を解決した後も数学的な見方・考え方の視点で振り返ることで自らを調整し、算数や数学のよさを次の学びや生活、社会へと生かそうとする姿を願う。



小中の取り組み

7つの視点（類推、演繹、帰納、多面的な見方、具体化・抽象化、モデル化、統合・発展）に着目した算数・数学の学習を通して、問い続ける児童・生徒の育成を図る。

小学校

成功をイメージして、目標をもち行動し続ける「粘り強く学ぶ姿」を育むためには、困難な場面でも自己を調整することで乗り越える積み重ねが必要である。そのために、「やってみたい」「はっきりさせたい」という問いをもち、問題の解決に向け能動的に動き出す主体的な姿を引き出すことが大切である。そこで、身の回りや数学の事象に出会うときに感じる漠然とした「あれ」「おかしいな」「なぜ」という違和感やずれを意識して、教材や発問を工夫した授業をデザインする。子供が他の場面や問題と繋がったり、新たな学びや生活に生かそうしたりした時に、その見方・考え方を価値付けることで、数学的な見方・考え方を自ら働かせられるように、指導に取り組んでいる。

中学校

解決すべき問題に直面したときに、「これまでに似た問題はなかったか」、「既習のどれが使えるか」という視点や解決時に「他の場面ではどうか」や「より良い方法はないか」という視点で振り返ることで、論理的・統合的に考える力が育まれると考える。また、生徒が自ら問いをもち、見方・考え方を働かせながら、予見・遂行・自己内省を繰り返し、問題解決に向けて取り組む「問い続ける姿」も大切にしたい。具体的には学びのプランを通してこの単元で意識したい視点を示し、見通しを持たせることで願う子どもの姿に近づくよう子どもの学びをデザインしている。また、自ら「条件を変えても成り立つか?」「他の場合ではどうか?」といった発展的な考えを価値付けることで、そういった思考を身につけ、実生活実社会に生かそうとするよう指導に取り組んでいる。

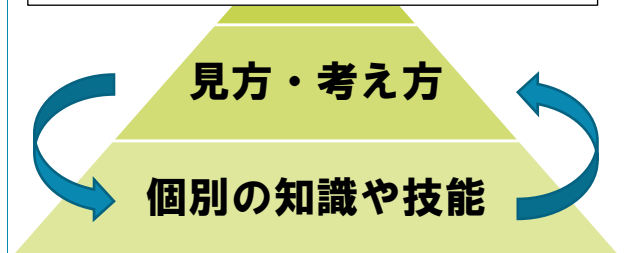
教科部で大切にしていること

科学的に探究し、根拠を基に考え、表現する力

理科における基本的な知識を用いることで、日常生活において安全に暮らすことができる（コンテンツベース）。その段階に留まらず、より広く深く思考を働かせることで、実生活に活用し、さらに豊かに生活できるような意識をもつ（コンピテンシーベース）。

生活の中で得た自然の事物現象に関する知識・実験観察の技能を基に、各段階に応じた見方・考え方を働かせて学習し、科学的に探究する力を身につけることで、実生活や実社会をよりよく生きることができるようにする。理科における科学的な探究の経験をもとに、既存の知識技能だけでは解決できない問題に対しても、より高次に思考を働かせ対処対応できるような力を身につけていく。

科学的に探究し、根拠を基に考え、表現する力



願う子供の姿

- ・自分たちで問題を見つけ、解決に向けた検証に見通しをもって取り組むことができる姿。
- ・何気ない事象に対しても、新たな視点で向き合える姿。
- ・問題が解決した後も新たな問題を見だし、さらにねばり強く探究し続ける姿。
- ・科学的な根拠をもとに現状を分析し、プロジェクトを進めたり、妥当性や説得力のあるプレゼンテーションで表現したりすることができる姿。
- ・自分の取り組みや検証について、客観的に見直しながら分析し、経験を次に生かすことができる姿。

小中の取り組み

- ・目に見えない自然事象について可視化し、思考したり説明したりしやすくするための表現方法として、イメージ図を用いる。
- ・見通しをもって学習を進め、内容だけでなく学び方をふくめて振り返る。

視点	小学校		中学校
	中学年	高学年	
科学的	理科の基本である検証の流れ（問題に対する根拠ある予想や仮説・適切な実験とその記録・分析と考察）に沿って問題解決していくことを繰り返す。 日常生活での経験や実験で得た結果を根拠に予想・考察する。	問題解決の方法を子どもたち自身が考え、条件を制御したり、その妥当性を検討したりすることができるように、学習の流れを文脈化し、学んだことをスライドに整理していく。 経験、既習の知識、実験で得たデータを根拠に吟味して予想・考察する。	課題に対して、生活経験や既習知識をもとに予想を立て、課題解決のための方法を、習得した知識・技能を生かして自ら選択し、活用していく。また、問題解決の過程を振り返り、その妥当性を検討し、次の課題解決の場面に生かせるようにする。
探究	学習の流れに沿って検証し、問題解決する経験を積み重ねる。 単元の最後に学び方についても振り返り、問題解決のすべも増やしていく。	問題解決の流れを見通し、自分たちで検証の方法を考えて取り組む。 学習の経緯を振り返り、検証方法の妥当性や、学び方の効果についても考え、次に生かせるようにする。	実験・観察の結果やデータを分析して、そこから分かることを、既習知識と結びつけながら考える。
表現	学んだ内容、思考や理解の変遷について、言葉での説明を補うために図・写真・映像を積極的に用いる。 言葉での表現を写真や絵、イメージ図で補い、自分の考えを伝える。	写真や絵、イメージ図、実験データを整理したグラフや表と、言葉での表現を結び付け、自分の考えをわかりやすく伝える。	目に見えない（抽象度の高い）事象についても、記号やモデル図などを用いて可視化することで、言語での説明を補いながら表現ができるようにする。

教科部で大切にしていること

自分の思いや願いを実現しようとする力

生活科は、幼児教育と小学校教育のスムーズなつながりをもたせる教科として誕生した。低学年においては、教師の説明を中心にした学習ではなく、児童が主体的に具体的な体験活動をもとにした学習を進めていく必要がある。これらを踏まえ、「自分の思いや願いを実現しようとする力」を教科で大切にしていることとして設定した。

教科を通して育成する力を育むために、自分にとって興味・関心があり、価値があると感じられる学習活動を自ら進んで行うことができるということを大切にしていく。多くの「ひと・もの・こと」と出会い、様々な経験ができるようにする。具体的な活動や体験を通して気付いたことを基に考え、気付きを確かなものとしたり、新たな気付きを得たりするようにする。そのため、活動や体験を通して気付いたことなどについて多様に表現できるようにする。また、自分にとって思いや願いを実現できるような必要な情報（図鑑・インタビュー）を集められる活動場面を設定する。

自分の思いや願いを実現しようとする力

見方・考え方

個別の知識や技能

願う子供の姿

- 自分と身近な人々、社会及び自然と関わる活動や体験を通して思いや願いをもつ姿。
- 活動を振り返ることで得られた手応えや自信により自らの学びを次の学びへつなげようとする姿。
- 相手意識や目的意識をもち、自分自身にとって価値があることを振り返りや伝え合いなどの様々な方法を用いて、活動の楽しさや伝え合うことのよさを実感できる姿。
- 体験活動と表現活動が豊かに行き来することで、よりよい生活に向けて思いや願いを実現させながら気付きの質が高まる姿。

小学校の取り組み

子供が没頭できる環境づくり

小学校

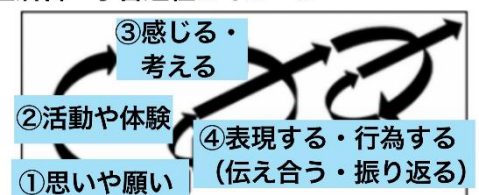
○主体的な子供を育てる

子供の興味・関心があることを大切に、学びを展開していく。その学びの中で、生活科では情意面の成長のために子供の「やってみたい!」を実現できる単元構成をする。思い通りに行くことがなくとも、自分の感情や行動をコントロールできる力や「自分はできる」という自己有能感を持てるよう、教師の声掛けや子供同士のケアの関係を大切にする。

○体験活動と表現活動の充実

振り返り表現する活動として、言葉や絵、劇化などにより表現する活動が位置付けられる。活動や体験したことを言葉などによって振り返ることで、無自覚だった気付きが自分の中で明確になったり、それぞれの気付きを共有し関連付けたりすることに結びつく。右図「生活科 学習過程のイメージ」より、教師が4つの学習過程を理解して、繰り返し取り組むことができる体験活動を子供たちと決めていくようにする。

生活科 学習過程のイメージ



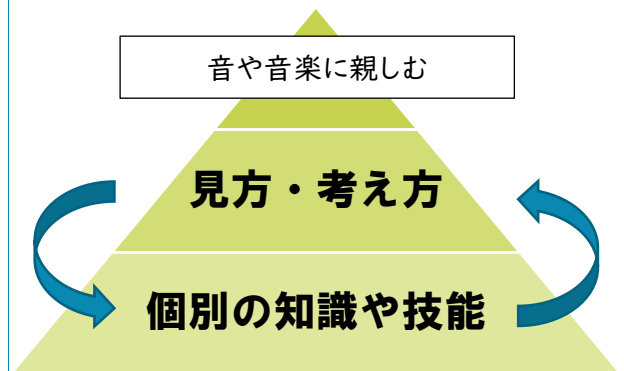
教科部で大切にしていること

音や音楽に親しむ

子供たちが将来より豊かな生活を育むためには、音や音楽を場面に応じて使ったり聞いたりするだけでなく、音や音楽に触れることで感性を働かせる必要がある。それを養う場の一つとして教科としての「音楽」があると、音楽科では考えている。故に子供たち自身が音や音楽に親しむ環境を整えることを、本校音楽科で大切にしている。

子供たちは教科の内外で多様な音や音楽に触れ、時に表現している。音楽科は教科の中で、子供たちがそれぞれの音や音楽の魅力や構造を再発見できるような機会を設けていきたい。

子供たちが豊かな生活を送るために音楽を選択肢に入れたり、様々な物事に対して豊かに感性を働かせられたりするよう、教科部として環境構成を行っていききたい。



願う子供の姿

音楽科では子供たちが音や音楽に親しみ活動を行っていった際に願う子供の姿として、以下の4つの姿を考えている。

- 身近な音や音楽、また楽器等に興味を持つ姿
- 感性を働かせ、思いや意図を持って表現しようとする姿
- 音や音楽を思いや意図を持って表現することでの達成感・成就感を得る姿
- 音や音楽を、日常を彩ったり感情を表現したりする選択肢の1つとして用いることができる姿

これらの姿を発達段階に応じた形で実現することで、子供たちにとってより親しみのある音や音楽が生まれる。その音や音楽が彼らのより豊かな生活の一部になっていくはずである。

小中の取り組み

子供たちの「やってみたい」を大切にした授業作り

学校

小学校では身近な音や音楽を材に、魅力や構造に気づく学習活動をデザインしている。

例えば低学年では、生活のなかで見つけた音や音楽を聴いたり録音したりする活動を行っている。高学年では学級の曲作りでは、流行曲、BGMをよく参考にして歌詞やメロディを作っている。それぞれの活動に共通しているのは、何気なく聞き流している日常の音や音楽が認知的な音楽になることだ。そうすることで音の魅力、音楽の持つ意味や構造に子供たちが迫るきっかけになるはずだ。

「しとしと雨の音を表現するので、小さく木琴をたたく」「楽しさを歌詞に込めた。歌う際は大きくしよう」などの思考が、音や音楽が身近になるためには必要である。

中学校

中学校では、生徒の「やってみたい」という材を選択して取り組めるような学習活動をデザインしている。

例えばアルトリコーダーの課題では、生徒から曲のアンケートを取って課題として扱ったり、小学校の鑑賞で聴いた曲を課題にしたりして、生徒が興味を持って楽曲に取り組めるようにした。また、学習方法も生徒が取り組みたい（音符だけが書いている楽譜、階名が書いている楽譜、運指表を指している動画、運指表がみられる動画）などを用いて、自分で何をつかうとよいか考えて取り組めるようにした。

小学校で培った思考を生かして、様々な思いや楽曲の意図を読み取ることを大切にしながらも、「こんな風に歌いたい。そのために、こんなことをやったらどうだろうか」など、体を使って表現できるように即席のミュージカルを考え、自己のイメージを聞き手に伝えられようとしている。

図画工作・美術科 教科デザイン

小学校：斉藤洋介 吉田昌弘

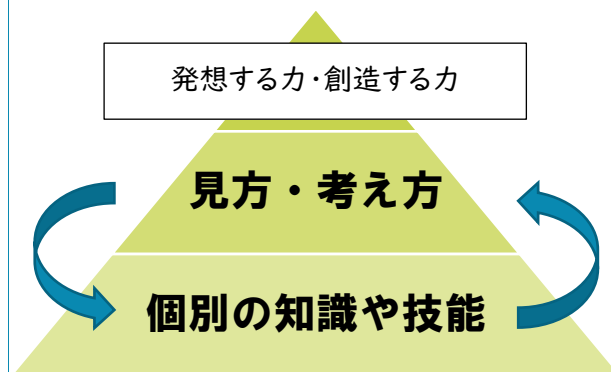
中学校：三井穂高

教科部で大切にしていること

発想する力・創造する力の育成

図画工作・美術科は、五感を使って材に親しみ、作品をつくりたり鑑賞したりする活動を通して、生活を豊かにするための感性を磨いていく教科であると考えている。そのために、材や作品と積極的に触れ合い、その形や色に豊かに関わり、つくりだす喜びを味わえるような機会を多く設けたい。

今年度の図画工作・美術科では、新しい考え方に気付いたり、思い付いたりする「発想する力」、今までにない新たなものを「創造する力」を育成することで子どもの生活を美しく豊かなものにできると考えている。



願う子供の姿

- 「失敗したらどうしよう」という恐怖心を、「いろいろなものをつくりたい」という好奇心へと変貌させられる姿
 - ・何度もチャレンジする姿
 - ・失敗を自己の経験として生かす姿
- 今までにない新しいものを思い付き、つくり出す姿
 - ・他者の考えや文化を受け入れる姿
 - ・自己の経験や今あるものを生かす姿
 - ・何かと何かを組み合わせ、新たなものをつくり出す姿
- 日常生活において、何気ない身の回りのものに興味関心を持ち、豊かな心で生活を楽しむ姿
 - ・身の回りにある色や形のおもしろさに気付く姿
 - ・自然が作り出す形・音のすばらしさに感動する姿
 - ・美術作品や工芸作品の鑑賞を通してその作品のよさや美しさを守っていこうとする姿

小中の取り組み

- ・材や自分とじっくり向き合う時間の確保
- ・自分の経験や考えを友達と共有できる場の設定

小学校

- 題材の導入を中心に試行錯誤の時間や環境を十分に設け、自分から「やってみたい。」と思えるようにする。
- 自分・他者・材との対話を意識した活動を積極的に取り入れ、各題材で子供たちが思いつきそうな材やその題材に合った材（それまでに使用した経験のある道具や材料も含む）を使用できるようにする。
- 作品を展示する際は、その作品がどんな場所に似合うか考え展示する。この活動を通じて何気ない日常の中にある感動やおもしろさに気付けるようにする。

中学校

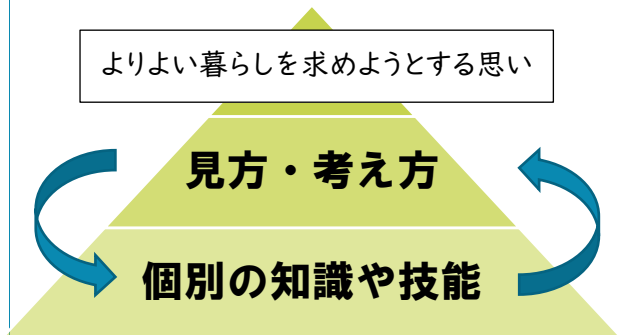
- 固定の概念にとらわれず、自由にのびのびと発想し創造できるよう、題材や発問を工夫する。一つの作品に粘り強く取り組み、少しずつ完成していく様を楽しむ。
- 常に自ら考え、ものごとを生み出す力を育成するために、美術の専門的な知識や技能を習得しながら、思考を深められるようにする。作品や他者との対話を繰り返し行う中で、自己理解や他者理解を深め、視野を広げていく。
- 他教科との繋がりや生活の中にある美術について意識しながら、作品作りを行う。また、日頃から美術的な視点で物事を捉えられるようにする。

教科部で大切にしていること

よりよい暮らしを求めようとする思いを育てる

小学校 家庭科、中学校 技術・家庭科ではともに、よりよい生活や持続可能な社会の構築に向けて、生活を工夫し創造する資質・能力を育成することが求められている。これにはまず、子供の「やってみようとする思い」を引き出すことが大切になると考えた。

身近な生活から自分事として課題を捉え、実践的・体験的な活動に評価・改善を繰り返しながら取り組む。そうして小学校で培った「学んだことを生かしたい」という思いを、中学校で「家庭や社会に役立てたい」という気持ちに繋げていく。これにより、子供の「よりよい暮らしを求めようとする思い」を育てていきたい。



願う子供の姿

○ 課題解決に向けて、よりよい暮らしを求めようと繰り返し取り組む姿

生活の中から、問題点を見いだす。その問題点の解決に向けて実践的・体験的な活動に取り組む。その活動を評価・改善していくことで、現状の生活をよりよくしよう、さらに豊かにしていこうという思いが育まれると考える。問題解決に向けて改善しようとする活動を繰り返すことで、よりよくしようとする姿へとつなげたい。そして、授業後も発展的に生活を豊かにしようとする気持ちをもてるようにしたいと考える。

○ よりよい暮らしに必要なすべを身に付けようとする姿

生活をよりよく豊かにするためのすべとは、知識や技能の習得に限らず、他者と協力して生活をよりよくしていくことも考えている。学びを進めていく上で、子供達には、知識や技能を身に付けたい、発揮したいと自ら進んで問題解決に向けて知識・技能を習得する必要性を実感することが欠かせないとする。また、一人では解決できない場面に直面したときには、友達に相談したり考えを聞いたりすることで、友達と共に学ぶ良さや解決していくことの面白さを感じられることを願っている。

小中の取り組み

○ 身近な生活から自発的に問題点を見いだす学習過程

○ 授業の中で、身に付けたすべを使う必要性を感じる題材の工夫

小学校

身近な生活の中から問題を見だし、課題を自分事としてとらえ「やってみよう」と思える題材であるかを吟味する。また、学習の初めには、題材を通して自分の目指す姿を考える。そして、学習後には、学んだことを生かしたいと思える課題を設定する。そのような学びを積み重ねていくことで学習から離れた後も「やってみよう」という思いが生まれるように意識したい。難しそうだけど「やってみよう」という、自ら学びに向かう気持ちをもって友達と共に協力しながら課題解決ができるようにする。また、学習内容や、どのような力がついたのか、自らの成長を実感できるように学びの積み重ねを確かめられる振り返りを実践し、中学校への学びのつながりを見出すきっかけ作りとしたい。

中学校

生徒自身が授業や家庭でも「挑戦してみよう」「やってみよう」と思えるように、生活の中から見つけた課題に対して自分なりの目標を立てられる題材、できた喜びや達成感を味わえる体験活動を充実させる。そうした体験的な活動を軸にして、授業では「生活をよりよくするための課題を設定」→「実践」→「取り組みを見直す」→「次の発想」へと促せるように、学習過程を重視する。そして、社会で生きる力となるよう他者との協働的な学びを取り入れ、多様な考えに触れながら課題解決に取り組めるようにする。また、授業で学んだことがらを振り返り、改めて生徒自身の生活の中で発揮できる、「やってみよう」という思いを大切にしていけることを意識したい。

体育・保健体育科 教科デザイン

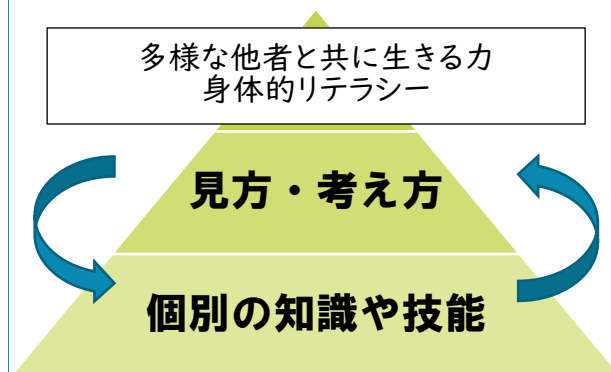
小学校：深田淳一 出越拓磨 野下卓泰 菰田健寛
正木美羽

中学校：藤野直柔 荒川健太 大國祐介 尾口李花

教科部で大切にしていること

多様な他者と共に生きる力&身体的リテラシー

ウェルビーイングの考え方が重視される世の中にあって、体育科では豊かなスポーツライフの実現に向けて、生涯にわたって運動に親しむ資質・能力の育成が求められている。本校では、多様な運動経験を持つ子どもたちが、その違いを包摂して、楽しみながら自らのよさを発揮し、十分に運動の特性に親しめる体育学習を目指している。そのために、課題解決に向けて協働的に学び、共に楽しい時間を創っていくことを通して、多様な他者と共に生きる力と身体的リテラシーを高めていく。



願う子供の姿

- 多様な他者と共に協働的に課題解決をしながら、楽しい時間を創ろうとする姿
- 自他を振り返り、次の見通しをもって、自らの思考や行動を調整しようとする姿
- 生涯にわたって運動やスポーツに親しもうとするメンタリティとそれを可能にする健やかな身体を目指す姿

小中の取り組み

- 魅力的な材の選定と場づくり
- テーマや問いの精選・再構築
- AAR の学習プロセス・ICT の活用
- ギリギリを生み出すアダプテーション
- 安心・安全な場づくり
- 学級の雰囲気とよりよい人間関係づくり

小学校

子どもが思わずやってみたくくなるような魅力的な材の選定と場づくりを重点に置き、子どもが時間も経つのを忘れて、何度も何度も運動や運動遊びに取り組み、夢中になる姿を引き出していく。そうした、「運動への没頭」が、子どもが運動の特性に十分に親しみ、身体感覚を養っていくためには必要である。そこで、子どもたちがいつでも自由に関わることができる場を校内に常設し、定期的にアップデートする試みに取り組んでいる。また、多様な運動経験を有する子どもたちが運動に没頭するためには、第一に安全・安心な環境が不可欠となる。用具や行い方の工夫をはじめ、思ったことや考えたことを自由に言い合える雰囲気や「聴き合い」の関係性を築いていくことも重要である。多様な他者と関わりながら、子どもたち自ら場や行い方を工夫し、協働的に学び、共に楽しい体育の時間を創っていくとする営みを経て、結果的に一人ひとりの身体的リテラシーが高まっていくような授業をデザインしていく。

中学校

生涯にわたり心身の健康の保持増進を図るために、身体的リテラシーを育成する。中学校では、運動の特性や魅力に触れながら、自然と技能を身につけられる授業や思考を働かせ、自己実現に向けた協働的な学びの場を追究する。そのために、自己の問題を捉え、解決のためのすべを学び、実現に向け没頭できる場を設定していく。また、没頭できるための適切な「問い」を示し、生徒たちの思考を働かせる場面をデザインする。

中学校では、さらに、動画や写真を撮り合い、相互評価をすることで、1つの「問い(課題)」に対し、仲間と協働して解決する力を高めていく。そして、小中9年間のゴールとして、「自ら考え、活動したことをパフォーマンスとしてフィードバックし、生かしていく」ことや、自分たちに必要なアダプテーションを考えていくことで「楽しさの創造」を目指していく。

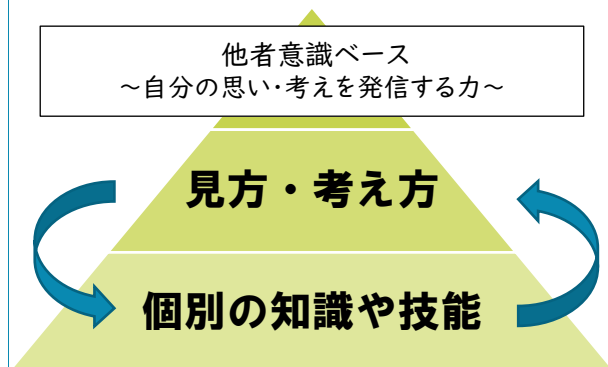
外国語活動・外国語科 教科デザイン

小学校：佐宗敏美 栗山智恵
中学校：増尾翼 友廣幸平 稲村竜也
Stebbins Antoine

教科部で大切にしていること

他者意識ベース ～自分の思い・考えを発信する力～

昨今、グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように限られた業種や職種だけではなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっている。附属鎌倉小・中学校外国語科としては、教科書の決まった表現をただ教えたり、ただ使わせたりするのではなく、実際にどの場面でその表現が使えるのかを生徒と共に考える。また、その活動を通して、目的・場面・状況に応じた自分の思いや考えを適切に発信する英語力を育むことを目的とする。他者に配慮しながら、自分が伝えたいことなどを、英語を用いて分かりやすく伝えようとする子供の姿を目指す。



願う子供の姿

◎グローバル化する社会を生き抜くためのコミュニケーション能力を身につける姿を願う。

以下の姿を、9年間の外国語活動・外国語学習を通して深めながら、子供たちの英語力を育む。

- ①母国語ではない言語を使って行うコミュニケーションに慣れ親しむ姿
- ②自分のことを伝えるために、他者意識を持ちながらコミュニケーションを図ろうとする姿
- ③トライ&エラーを繰り返し、目的・場面・状況に応じた表現力を身につけるために粘り強く取り組む姿
- ④外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、発信する姿
- ⑤課題に対してお互いの考えなどを共有し、その解決に向けて理解を深める姿

小中の取り組み

小学校	中学校
○児童にとって身近な人物や事柄を話題にし、進んで伝え合う活動を設定している。英語を「聞く」ことからはじめ、段階的に自分の思いや考えなどを伝え合う活動を行っている。 ○教師と児童、児童同士のやり取りを通じて、教師や友達のパフォーマンスを真似たり、取り入れたりすることによる学び合いを大切にしている。Small Talk やアクティビティを行うときにも既習表現を取り入れ、児童の「気づき」が生まれる場面づくりを意識している。この「気づき」というのは、自分と他者の考え方の違い、同じような内容を伝える場合でも扱う表現の違い、伝える目的や対象による表現の違いなど、コミュニケーションを通じて様々な違いにふれるとともに、それぞれの違いを受け入れる姿の育成を図っている。 ○分からない表現でも推測しながら聞こうとする姿や、間違えても何とか伝えたり聞いたりする粘り強い姿を価値づけている。毎回授業の振り返りを行うことで、次の学習への見通しを持てるようにしている。	○自分の生活に身近な話題や日常でのやり取りなどを言語活動のテーマに設定し、目的・場面・状況に応じた多様な言語活動を行っている。コミュニケーションは他者がいなければ成り立たないことから「一人ひとりの違いを理解し合意形成することの大切さや難しさ(=共生)」を意識させるとともに、簡単な語句や表現を用いて自分の思いや考えを英語で伝える力(=自己実現)の育成を図っている。 ○活動内容によっては、即興性を取り入れたりペアやグループで意見交換をする中で得られた「気づき」を共有したりすることで、表現の幅が広がりたり正確性が高まったりして、伝えたいことを自己調整して再構築させた、ワンステップ上のコミュニケーション活動につなげようとしている。 ○子供たちが、間違えてもいいから英語を主体的に使おうとする姿を大切にしている。そのやる気を引き出すサイクルとして、知識のインプットから様々な表現活動を通したアウトプットにつなげ、さらに子供たち自身が各単元の「学びのプラン」や各活動の振り返りを通して自らの達成度や改善点などに気づき、次の単元の学びに活かそうとしている。

特別の教科 道徳科 教科デザイン

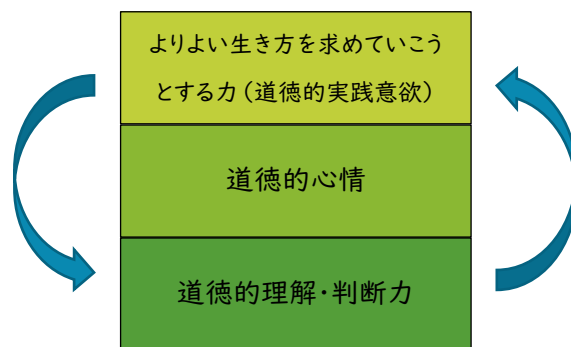
小学校：根本哲弥

中学校：重廣雅美 稲村竜也 関克彦

教科部で大切にしていること

よりよい生き方について考え、求めているこうとする姿

道徳科の目標は、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことである。道徳性について、右の図から考えてみたい。1時間の授業を、道徳的価値について「どういうことだろう?」、「何がいいのかな?」と問いを持ち、「わかった!」、「そういうことか!」と理解する(道徳的理解・判断力)。そして、理解することで「いいなあ」、「それは素晴らしいなあ」と心が動く(道徳的心情)。さらに、自分にも同じ心があると自覚すると、「自分もそうありたいな」、「やってみたい」という意欲が生まれる(道徳的实践意欲)。このような思考の流れと心の高まりが道徳性の育成に繋がる。



願う子供の姿

- 当たり前を当たり前とせず、問いをもって考えようとする姿
- 自らの経験や理想とする生き方からよりよい生き方について考えることができる姿
- 目に見える行為だけでなく、目に見えない行為を生む心についても考えることができる姿
- 善悪の間に揺れながらもよく生きようとする人間のよさについて考えることができる姿
- 様々な状況や人物の立場に立って考えることができる姿
- 現在だけでなく、過去や未来もつなげて考えることができる姿
- 1時間の授業だけでなく、これまでの道徳の授業や、他教科領域、家庭生活等とつなげて考えることができる姿
- 学んだよさについて調査したり、実践したりしながら、よりよい生き方について考え、求めているこうとする姿

小中の取り組み

考えの広がりや深まりを生む発問、子供の発言をもとにした問い返し、思考を可視化して整理するための板書、考えを共有するための ICT の活用などから子供とともに作る授業の工夫

小学校	中学校
「よりよく生きるための基盤となる道徳性」を養うためには、よりよい生き方とは何かと問いを持ち、対話をしながら追究していくことが重要である。 そのためには、「親切にすることはよいことだ」、「努力することは大切だ」などといった既存の概念に対して、発問や問い返しによって揺さぶりをかける(概念崩し)ことで問いが生まれ、教材や他者、自分自身の経験などと対話をする時間を設けながら価値を再構築していく授業を大切にしたい。 また、図や絵を用いることで思考を可視化し、多面的多角的に考える一助となるような板書を取り入れたり、1時間の授業で完結するのではなく、授業で学んだことをまとめ、学びを継続させていくための掲示物を取り入れたりしていきたい。	中学生になると、道徳的価値を理解するだけの授業では「表向きはこうすべきだ」と思うが現実的にはそうではない」と本音を言わずに建前を述べてしまうことも多い。道徳的価値を理解しつつ、そのとおりにできないのはなぜなのか考え、人間理解できるよう促していきたい。そのため、子どもたち同士が考えを深め、議論することができるような環境を作りたい。多面的多角的に考えられる発問、問い返しを工夫したい。 また、子ども同士の話し合いの場を充実させるために、4月の始めに「話し合いの約束」を各クラスで考え、話し合いの前に実践できるよう促したい。 そして、道徳が授業で終わることなく今後の生活に活かせるようにしたい。そのために、ICTを活用して授業の始めに前時の振り返りから子ども同士で道徳的価値について、日常生活の具体例を共有する時間を持ちたい。

総合的な学習の時間 教科デザイン

小学校：村松秀憲 川口翔平
中学校：小山内大地 中村優海 中原幸司
友廣幸平 増尾翼 三井穂高

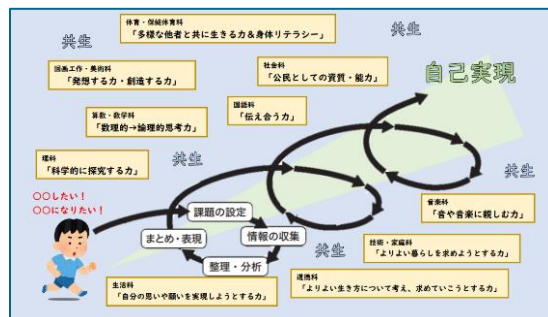
教科部で大切にしていること

自己実現力 ～やりたい事をやりたいように叶えていける力～

総合的な学習の時間は、自分の思いや願いを叶えるためのスキルを身につけ、生活を発展させていくための学びであり、「生きる」という営みそのものだと考えている。

子供たちが自分たちのやりたいことを叶えていくために探究のスパイラル（課題の設定、情報収集、整理・分析、まとめ・表現）を習得し、必要な場面で活用できるようになっていくこと。また、様々な問題に、適切且つ個性的・創造的に解決していけるようにするために、各教科で培ってきたものを発揮できるようにしていくことを目指していく。学校の教育活動の中では、総合的な学習の時間を教育課程の中核に位置付ける事で、習得したことを活用・発揮しながら自己実現力を高めていくことを想定している。

自分のやりたい事と本気で向き合い、本気で解決するすべを模索しながら、一人の人間としての生き方を考えていける土台を身につけていってほしいと願っている。そのためにも「こういう時にはこういう風に考えればいいのか。」と新しい発見をしながら、その学びが実際の生活の中で役に立ち、「なるほど」と思えることが増えていくような体験を積み重ねていってほしい。そういう時間を仲間と一緒に過ごし、切磋琢磨することで、「人に頼る」ことのよさも感じられる時間になればと考えている。



願う子供の姿

- めざす姿と今の自分と比較することで課題を見つけ、解決方法を頭に描きながら主体的に解決していく姿。
- 同じ目的をもった友達同士で切磋琢磨する中で、互いの関係が上手くいったところ、上手くいかなかったところに向き合い、よりよいコミュニケーション方法を模索している姿。
- 目的の達成に向けて、身近にある「人・もの・こと」と積極的に関わり、よりよく課題を解決している姿
- 目的を達成するまでにあるいくつかの節目で、解決に向けた取り組み方や友達とのコミュニケーションの取り方を振り返り、次の活動に向けての課題を見出している姿。

小中の取り組み

子供の生活の発展を支援する

小学校

子供の興味・関心があることを大切に、学びを展開していく。学びの一つ一つが生活の発展となるように、教師は学習材に対して興味関心が持てるような仕掛けをしたり、学びが発展していくような環境づくりをしたり、解決に向けての支援をしたりしていく。そして、その学びの中で解決のためのスキルを習得できるようにしていく。

高学年では、習得した解決のスキルを活用・発揮できる環境づくりも大切にしていきたい。

中学校

小学校で身に付けた課題解決のスキルをさらに活用・発揮できる環境づくりをする。教室や学校を超えて力を発揮できるよう社会に材を見出す仕掛けをし、自分の興味・関心を大切にしたい探究課題を設定できるよう個々に支援する。やりたいことを叶えていくための活動が自己満足で終わらず、社会の Well-being（共生）につながるようグループでの活動を展開する。

Try & Error を繰り返し、これから先の人生においても挑戦、実践していける子供達を育てていきたい。